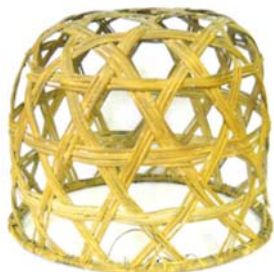


古い道具と昔のくらし ～生活のさまざまな場面で 使われた道具たち～



大館郷土博物館

衣類（いるい）いろいろ

昔^{むかし}の衣類を少し紹介^{しょうかい}します。現代^{げんだい}では、どんなものと同じなのか想像^{そうぞう}してみてください。

仕事着（女性用）



農家^{のうか}では普段着^{ふだんぎ}と仕事着^{しごとぎ}の区別^{くべつ}というものがそれほどありませんでした。ミジカ（半袖^{はんそで}の着物^{きもの}）を着てモンペをはいた姿^{すがた}が普段着であり、仕事着でした。

蓑（みの）



まんだの木^{まいの}の内皮^{ないひ}で作られて
います。
雨^{ふせ}を防ぐために衣服^{いふく}の上から
まとうためのものです。

菅笠（すげがさ）

スゲの葉^はで編^あんだ笠^{かさ}です。



テッキヤシ



27.5×13.0(cm)

指先^{ゆびさき}が親指^{ほか}と他の4指^し
を入れる部分^{ぶぶん}に分かれて
いるワラ製^{せい}の手袋^{てぶくろ}です。

せなか あ 背中当て（ネコ）



背負^{せお}い運搬^{うんぱん}のとき、クッションと
して背中^{せなか}にあてるものです。

夜着（よぎ）



185×161(cm)

綿^{わた}を入れて掛け布団^{かかけぶとん}にする大形^{おおがた}の着物^{きもの}をいい、夜寝^{よるね}る時に
上^{うへ}にかけて使います。

履物（はきもの）いろいろ

革靴^{かわぐつ}、スニーカー、ブーツ、サンダル・・・現在^{げんざい}は、たくさんの種類^{しゅるい}の履物があります。
さて、昔^{むかし}はどうだったのでしょうか。

子ども用下駄（げた）・ぽっくり・草履（ぞうり）



(左) 男児用下駄^{だんじ}・・・16.5×7.7×5.5(cm)
(右) 女児用草履^{めいじ}・・・16.0×6.5×4.5(cm)

(中) 女児用ぽっくり^{じょじ}・・・16.3×7.0×3.8(cm)

大人用下駄

どんなちがいが、ありますか？

①



②



③



④



① 男性用下駄^{だんせい}・・・20.0×8.0×6.5(cm)

② 男性用下駄・・・23.3×10.3×9.0(cm)

③ 女性用下駄^{じょせい}・・・22.0×9.0×5.5(cm)

④ 女性用下駄・・・21.5×9.5×8.5(cm)

足駄（あしだ）

雨や雪で足がぬれないよう、
「つまかわ」がついています。



(左) 男性用足駄・・・23.0×10.3×13.2(cm)

(右) 婦人用足駄^{ふじん}・・・21.3×9.5×9.5(cm)

わらぐつ

冬に、はくものです。



(左) 子ども用わらぐつ・・・20.0×9.0×14.8(cm)

(右) 大人用わらぐつ・・・26.0×11.5×19.5(cm)

ふみ俵（ふみだわら、ふみだら）

直径 28.0×42.0(cm)

こめだわら^{こめだわら}、ちゅうおう^{ちゅうおう}
米俵を中央から切ったようなかたちの雪踏み^{ゆきふみ}の道具。
はき^{はき}緒^おと引縄^{ひきなわ}をつけて操作^{そうさ}して、家の前の雪を踏み固め^{かため}、道^{みち}を作っていました。



暖房（だんぼう）いろいろ

冬の厳しい大館には、暖房が欠かせません。昔は、どんなもので「暖」をとっていたのでしょうか。

手あぶり



小型の火鉢です。一人で一台を使うため、必ず対（2台1組）で作られていました。（一台は自分用、もう一つはお客さん用）

行火（あんか）



（左）24.8×24.5×26.5(cm)

（右）24.6×24.6×26.0(cm)

中に炭を入れ、布団をかぶせたり、コタツの中に入れたりする暖房器具です。

長火鉢（ながひばち）・箱火鉢（はこひばち）



（左）長火鉢 28.5×42.5×22.5(cm)

（右）箱火鉢 30.0×30.0×26.0(cm)

居間や茶の間などに置いて使用されました。

灰ならし



8.3×7.5(cm)

火鉢などの灰をかきならすのに用いる金属製の道具です。

やぐらこたつ



42.2×42.2×31.8

枠組みの中に熱源（炭など）を入れ、外側にふとんをかけて使いました。ふとんとやぐらの間に手や足などを入れてあたたまります。

炭箱（すみばこ）・火消し壺（ひけしつぼ）



（左）炭箱 26.8×26.5×50.3(cm)

炉や火鉢につぐために、炭俵から小出しにした炭を盛っておく道具です。

（右）火消し壺 直径19.5×18.9(cm)

火のついた炭を壺の中に入れ、火を消すものです。

洗濯（せんたく）に使われた道具

今は、洗濯・脱水・乾燥まですべて行う「全自動洗濯機」がありますが、昔はすべて手作業で行われていました。

洗濯板（せんたくいた）とたらい



（左）洗濯板 49.5×26.0×1.5(cm)

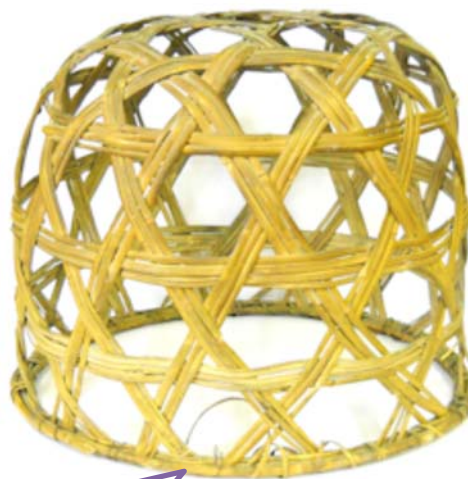
（右）たらい 直径31.4×15.2(cm)

洗濯板は明治時代に外国から入ってきました。波型になっている部分に洗濯物をごしごしこすって汚れを落とします。

洗い張り板



モッコ



直径 68.0×55.0(cm)

洗濯物を乾かすのに使いました。

216.5×49.0×1.7(cm)

着物をほどいて布にもどして洗った後に、ノリづけしたものをきれいに伸ばすために、張りつけて干すための道具です。

アイロンがけ（しわのばし）に使われた道具

服のしわをのばす道具は、かなり古くからありました。現在は、電気の熱を利用していますが、昔は火や炭の熱を利用していました。

火熨斗（ひのし）



直径11.5×5.5(cm) 取っ手部分 22.0cm

丸い部分に炭火を入れて使います。炭の熱と道具の重さの2つでしわを伸ばしました。江戸時代から昭和初期あたりまで使われたと言われています。

焼きゴテ



37.2×4.3×2.8(cm)

火鉢の中に入れて、熱して使います。細かい部分のしわを伸ばしたり折り目をつけたりするのに使いました。

すみび炭火アイロン

16.5×9.1×17.0(cm)

ふたを開けて火のついた炭を入れて、その熱で布のしわを伸ばします。炭から出る煙を逃がすために、煙突もついています。明治時代に外国から入ってきました。



電気アイロン



18.5×9.2×10.0(cm)

大正時代ころから使われるようになりました。

初期の電気アイロンには、温度調節の機能がありませんでした。

スチームの機能もついていないため、霧吹きなどを使っていました。

裁縫（さいほう）に使われた道具

むかしは、自分たちが身に付けるものは、ほとんど手作りだったため、いろいろな道具が使われていました。

紵台（くけだい）



30.5×45.0(cm)

布がたるまないように、一方を張ること
に用いる道具です。

むかしは、各家庭で必ずといっていいほど
見かけました。

テッキャシを編む手形道具

テッキャシ



手形道具



しべ型



(左) 手形道具 49.0×約 11.0×約 4.0(cm)

「テッキャシ」と呼ばれるワラ製の手袋
を編むための道具です。

(上) しべ型 42.5×10.0(cm)

「わらぐつ」をつくる時の型です。

あしづ 足踏みミシン

41.0×86.0×74.0(cm)

昭和初期、SINGER 製。

足で踏み板を踏む力（上下運動）
をベルトの動き（回転運動）へと伝
え、布をぬいあわせていくミシンで
す。今から40年くらい前（昭和の
中頃）までは、家庭で多くの人たち
に使われていました。



ちくおんき

蓄音機・ラジオ・テープレコーダー

人々が「音」を楽しむための機械も次々と出てきました。

蓄音機（ちくおんき）



蓄音機は、レコードを聞くための道具です。手でぜんまいを巻いて動かしていました。上の「ラッパ」がつくことで、音がよくひびくようになります。右のものには、ラジオがついています。

真空管（しんくうかん）ラジオ



（左）50.5×27.0×26.5(cm)

（右）31.5×44.3×23.2(cm)

中に「真空管」というものが入っているラジオです。はじめは、取り扱いも面倒で値段も高いものでしたが、しだいに改良され、人々に親しまれるようになりました。

テープレコーダー



テープに音を録音したり、録音したものを聞いたりするための機械です。

明かりに使われた道具

電気のなかった時代の明かりとして使われた道具を紹介します。

ろうそく架け



長さ 47cm

下の皿にろうそくを立て、部屋の「はり」などにかけて、室内を明るくしました。

カンテラ



カンテラ全高14.0cm 直径6.5cm
かぎ 全長 18.0cm 全幅11.0cm

ブリキでできた油壺の中に灯油を入れ、綿糸を芯として火を点した照明具です。携帯用として外出時などに使いました。

ちょうちん 提灯タテ



火袋の中にろうそくを仕込んだ灯火具です。これは、外に出しておくタイプですが、携行用のものもありました。

ランプ



灯油などを入れて、芯に火をつけてまわりを明るくする照明具です。カンテラは外で使うことが中心でしたが、ランプは主に屋内で使いました。灯油が燃えることにより、ガラスがきたなくなるため、掃除が必要でした。

かんけい 水に関係した道具

水道がなかった時代に水に関係して使われた道具を紹介しします。

ておしポンプ



ポンプ本体 最大幅34×最小幅22×高さ 60(cm)
ポンプ台座 長さ 14×幅 69.5×高さ 4.8(cm)
井戸から水をくみ上げるためのポンプです。

桶（おけ）



ちよつけい
直径24.0×50.0(cm)
くみ上げた水を運ぶためのものです。

水がめ



直径 52.0×61.0(cm)

水道がなかった頃は、家の外からくんできた水をこのような「かめ」にためておいて使いました。

てつ
鉄びん



ゆをわかすための道具です。

囲炉裏の上につるしたり、火鉢にのせたりして使用しました。

ちょうどひん 調度品いろいろ

ちょうりやさいほうにつかうものいがいにも、にちじょうせいかつもち調理や裁縫に使うもの以外にも、日常生活で用いられるいろいろな家具や道具がありました。

柳行李（やなぎごうり）



（左） 57.5×39.5×22.0(cm)

（右） 40.5×59.5×18.0(cm)

衣料、文書など様々なものを入れるための道具です。かつては「行李ひとつで嫁に行く。」などという言葉があったほど衣料の運搬具、貯蔵具として重要でした。
右側のものは、「トランク型」で、持ち運びに便利なため、旅行用などに使われました。



長持（ながもち）

73.0×171.0×75.0(cm)

衣服、調度品などを入れる蓋つきの長方形の大きな箱です。運ぶ時は両端の金具に棹を通して二人でかつぎました。

箆筒（たんす）



30.1×60.8×57.5(cm)

衣服、小道具を入れるのに用いられました。

蚊帳（かや）



部屋の上からつりさげて寝る場所をおおうためのものです。夏の夜、寝る時に蚊にさされないようにするために必要でした。

また、蚊が中に入らないように、すばやく蚊帳の中に入るテクニックが必要でした。

柱時計（はしらどけい）



56.5×31.0×11.5(cm)

柱^{はしら}や壁^{かべ}にかけておく時計です。ふりこが動いて時を刻みます。電池^{でんち}ではなく、ゼンマイの力によって動いています。1週間～10日に1度くらいのペースでゼンマイを巻かないと時計は止まってしまいます。

鏡台（きょうだい）



鏡^{かがみ}部分^{ぶぶん}36.2×71.8(cm)

引き出し^{ひきだし}部分^{ぶぶん}25.5×46.5×21.0(cm)

鏡と鏡を支える台で作られている家具。引き出しがあり、化粧道具^{けしょうどうぐ}などを入れておくことができます。昔^{むかし}は婚礼道具^{こんれいどうぐ}の一つとして欠かせないものでした。

エツメ



65.0×53.0×39.5(cm)

「エツメ」という名前は「嬰詰^{えいづめ}め」から来ていると言われています。家事^{かじ}や農作業^{のうさぎょう}などで忙しい時に赤ちゃんを入れて育児^{いくじ}するためのものです。中にワラや布団^{ふだん}などをしくことで、やわらかくするとともに「おもらし」などをしても赤ちゃんが不快^{ふかい}な思いをしないように工夫^{くふう}されていました。また、中に入れた赤ちゃんを布団や布などでくるむことで、赤ちゃんが動き回^{うごまわ}らないようにしていました。「エツメ」の他^{ほか}に「エチコ」「エズコ」などとも呼ばれます。

ちょうり調理に使われた道具

炊飯器やガスレンジ、電子レンジなどの電化製品がなかった時代は、調理のすべてが手作業で行われていました。

七厘（しちりん）



直径26.0×21.0(cm)
木炭などを燃料に使用する調理用の
炉です。

ヘツツイ



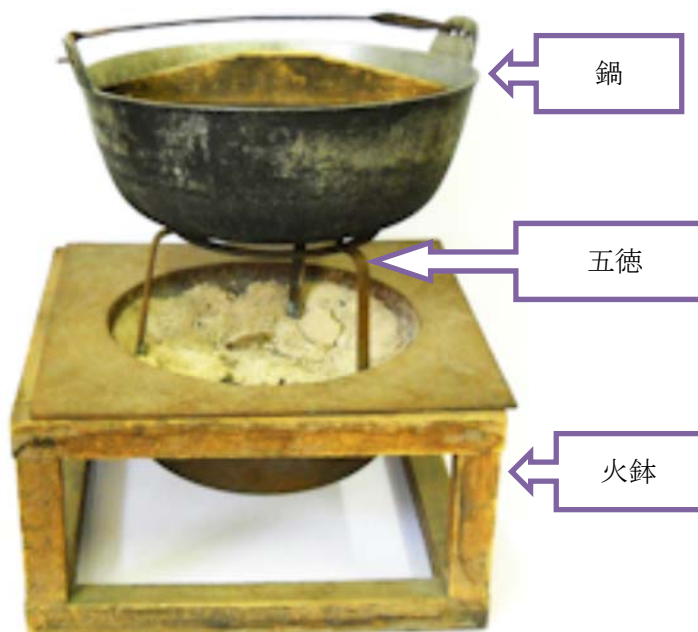
全長76.5cm全幅54.5cm全高54.5cm
鍋などをかけて煮炊きをする石でできた
かまどです。

自在かぎ



138.0×17.5(cm)
囲炉裏の火に対して鍋釜の高さを
自在に調節できる「かぎ」のことです。
「カギナ」ともいいます。

鍋・五徳・火鉢



鍋

五徳

火鉢

鍋……直径 32.3×17.0(cm)
五徳…直径 17.9×33.7(cm)
囲炉裏や火鉢の上に置いて、やかんや鍋をかけ
る台のことです。
火鉢…6.8×36.8×19.5(cm)

がま
つば釜



ちよつけい
直径 36.2×32.6(cm)

底が丸く、胴の中ほどにぐるりと「つば」がついていて、かまどに設置する際、つばのところでかまどの縁にかかるようになっている炊飯用の釜です。
はがま
羽釜ともいいます。

ひっ
お櫃



ままえちこ



「お櫃」は、炊いたご飯を入れておくものです。
「ままえちこ」は、保温するための道具で、わらでできています。お櫃ごと入れて使います。「飯櫃入れ」ともいいます。

ムシカマド



直径 46.0×70.0(cm)

かまどのない家庭で、ご飯を炊く時などに使われました。

蒸籠（せいろ）



43.5×47.0×92.8(cm)

蒸す料理に使う道具です。お湯を入れた「つば釜」の上に置いてもち米や茶わん蒸しを、湯気で蒸しました。

うす きね
臼・杵



臼…口径44.0×高さ 43.0(cm) 杵…86.0×42.0×10.0(cm)
もちつきの道具です。

かつては、お正月や節句、祝い事などでよくもちつきが行われていました。

み そ だる
味噌樽・味噌べら



いしうす
石臼



ちよつけい
直径27.0cm
高さ 23.5cm (上 13.0cm 下 10.5cm)
米や豆などをひいて粉にするための道具です。

樽…直径 78.7×67.0(cm)
へら (前) …96.3×11.3×1.5(cm)
へら (奥) …90.0×7.5×0.8(cm)

味噌を運んだり、貯蔵したりするための容器です。昭和30年代まで、ほとんどの農家で味噌を自分たちで作っていました。

こ ばち
捏ね鉢



うどんやそばを作るために、小麦粉やそば粉などをこねる時に使いました。

そば切り板
いた



64.0×108.0×3.2(cm)
こねて伸ばしたそばを切るための板です。

かんけい 学校に 関係した 道具

むかし 昔の学校で使われていた道具を紹介（しょうかい）します。

ふ がね
振り 鐘



ぜんこう
全高20.0cm

かねほんたい 高さ 9.0×直径 12.0(cm)

授業（じゅぎょう）の始まりや終わりなどを知らせるために、鳴らしながら校内を歩きました。合図（あいず）をする人は、校長先生（こうちょうせんせい）や校務員（こうむいん）さんなど様々（さまざま）だったようです。

きょうかしよ
教科書



明治（めいじ）から昭和（しやうわ）にかけて使用（しよう）されたものです。全国（ぜんこく）共通（きょうつう）の指導（しどう）ができるよう、国（くに）が作った（つく）たものです。現在（げんざい）のものとは、かなり（かなり）違います（ちがいます）。

算盤（そろばん）



たし算（ざん）、ひき算（さん）、かけ算（さん）、わり算（さん）などができる計算（けいさん）のための道具（どうぐ）です。

昔（むかし）は「読み・書き・そろばん」と言（い）われ、勉強（べんきやう）の大切な三要素（さんようそ）とされていま（いま）した。現在（げんざい）使（つか）われたい（たい）もの（もの）は「四つ玉（よっつたま）」とい（い）いますが、これ（これ）は「五つ玉（ごっつたま）」とよ（よ）呼（よ）ばれる古（ふる）いタイプ（たいぷ）です。

つくえ ふたりが
机（二人掛け）



105×62.0×36.5(cm)

木製（もくせい）の机（つくえ）です。「跳ね蓋（はねぶた）式（しき）」とよ（よ）呼（よ）ばれる机（つくえ）の板（いた）が上（あ）がるタイプ（たいぷ）です。2人（ふたり）で使（つか）います。